

# はじめに

本書を手にとっただきありがとうございます。この本には、自分が大学院生で学振に応募したとき、事前を知っておければ嬉しかったなと思う内容を詰め込んでいます。私自身、学振に申請したときはじめて研究計画書を作成する状況で、右も左もわからないなか、無我夢中になって執筆して推敲したことを覚えています。結果として、ありがたいことに特別研究員DC1として採用していただけました。

後輩と話しているあるとき、「学振申請書作成のコツを教えてください」「それではワークショップを開くのがいいのではないか」ということになりました。私が申請書を作成して得られた知見をできるだけ早く知ってもらい、よりよい研究計画書を書いてほしいと思っていたことから、すぐに実行に移し、学振申請書作成ワークショップなるものを開催しました。そのワークショップには文系理系問わず多くの大学院生が参加してくださり、その後も数年実施しました。ただ、私自身が忙しくなってしまったこともあり、最近では対面のワークショップではなく、書き方のコツを伝えるオンラインイベントを開いています。

それらの経験を通して私は文系理系問わずに計300件以上の申請書を読んでいます。分野を問わない数多くの申請書を読んだ経験から、申請書について確実に言えることがあります。「採用される申請書は誰が読んでもわかりやすい」ということです。専門でなかったとしても、その研究を行う背景、意義、目的、期待される成果がわかるのです。わかるだけでなく「面白い!」と興奮できるのです。

本書では、学振特別研究員制度の概要と審査の重要なポイント、上記の経験から得た学振申請書作成のコツを私が作成した申請書をモデルとして解説しています。また、生成AIを活用した申請書のブラッシュアップの方法についても、いくつかのモデルを使用した事例から解説しています。さらに、過去のイベントに参加してくださった一部の方から実際に採用された申請書見本を提供していただき、それらを付録に掲載しています。

私は、これまでの経験から学振の申請書を作成すること自体に価値があると考えています。専門外の研究者にもわかりやすく研究について記述することは、自身の研究の振り返りにつながります。また、申請書をブラッシュアップする過程で、研究自体もブラッシュアップされていくのです。研究自体もクオリティがあがって、伝える力も身につく、金銭的なメリットやキャリア上のメリットもある、となると書かない理由が見つかりません。

博士課程以降で研究されるあなたには、ぜひ学振の申請書を作成することにトライしてもらいたいと思っています。そして、本書がその背中を一押し、二押しできれば嬉しいと考え、できるだけわかりやすく、意味ある内容を盛り込むように心がけて執筆しました。学振申請書を作成することを通して、よりよい研究生を送られることを心より願っています。

2026年2月